

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

皮膚科の臨床 (1999.10) 41巻11号:1781~1783.

Hybrid Cystの2例

山田由美子, 加藤直樹, 真鍋公, 浅賀浩孝, 山本明美, 飯塚一


症 例

Hybrid Cyst の 2 例

山田由美子^{1*} 加藤 直樹^{1*} 真 鍋 公^{2*}
浅賀 浩孝^{3*} 山本 明美^{4*} 飯塚 一^{4*}

要 約 症例 1: 33 歳, 女性。左頬の径 6 mm 大, 淡褐色の皮内小結節。症例 2: 40 歳, 女性。左腕の径 2 mm 大, 暗赤色皮内小結節。両者ともに粉瘤を疑って切除したが, 病理組織学的に嚢腫は表皮性角化のほか症例 1 では毛包性角化を, 症例 2 では一部で pilomatrix の角化様式を呈しており, hybrid cyst と診断した。

I はじめに

hybrid cyst は, 組織学的に同一嚢腫内に異なる角化様式を示す部分が共存するものを指す。一般的な成書では, hybrid cyst は表皮性ないし毛包漏斗部の角化と毛包性角化が共存する, いわゆる Brownstein 型を指すことが多いが, 近年, その概念が拡大されつつある。本邦でのこれまでの報告をみても, ほとんどが Brownstein 型であるが, 今回, われわれはこの型の 1 例および表皮性角化と pilomatrix の角化が共存するまれな型の 1 例を経験したので, 若干の考察を加えて報告する。

II 症 例

症例 1 33 歳, 女性

初 診 1997 年 2 月 28 日

家族歴・既往歴 特記すべきことなし。

現病歴 1 年前に左頬に皮疹が出現し, 徐々に盛り上がってきたため, 名寄市立病院皮膚科を受診した。

現 症 左頬に 6×7 mm, 淡褐色, 弾性硬で, 中

心がやや陥凹した皮内小結節を認める (図 1)。

病理組織学的所見 表皮に著変なく, 真皮上層から下層にかけて嚢腫があり, 真皮下層において一部で嚢腫壁が破壊している (図 2-a)。その壁は, 顆粒



図 1 左頬の皮内小結節 (症例 1)

^{1*} Yumiko YAMADA & Naoki KATOH, 市立稚内病院, 皮膚科 (主任: 加藤直樹医長)

^{2*} Akira MANABE, 名寄市立病院, 皮膚科, 医長

^{3*} Hirotaka ASAGA, 札幌東徳州会病院, 皮膚科, 医長

^{4*} Akemi YAMAMOTO & Hajime IIZUKA, 旭川医科大学, 皮膚科学教室 (主任: 飯塚 一教授)

(別刷請求先) 山田由美子: 市立稚内病院皮膚科 (〒 097-8555 稚内市中央 4 丁目 11 番 6 号)

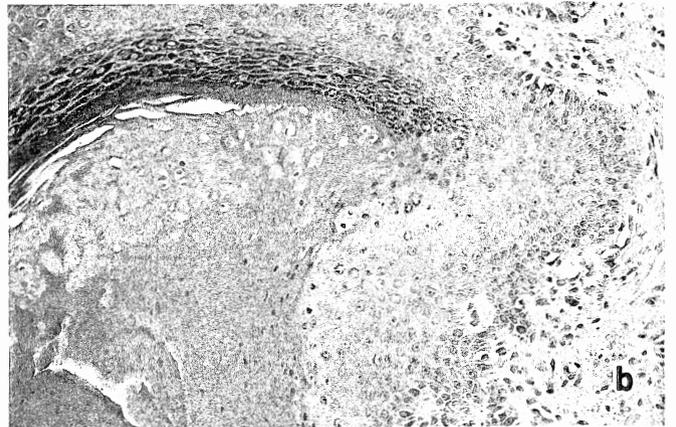
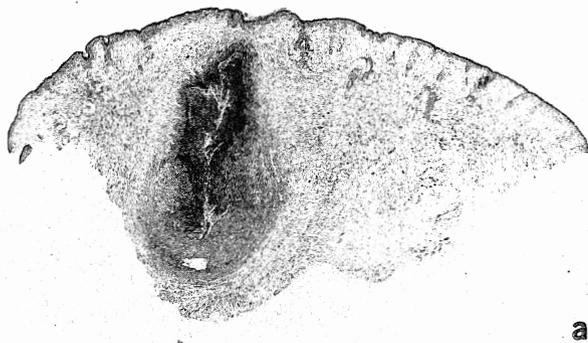


図2 症例1の病理組織像 (HE 染色)

a: 弱拡大像

b: 強拡大像



図3 左腕の小結節 (症例2)

層を有し、内腔に層状角質層を認める表皮性角化を示す部分が左上部に局在し、顆粒層を欠き、いわゆる毛包性角化の像がみられる部分が、囊腫右側から下半分に別れて存在していた (図2-b)。

治療および経過 単純切除後、再発はない。

症例2 40歳、女性

初診 1995年9月1日

家族歴・既往歴 特記すべきことなし。

現病歴 2カ月前に左腕に痛みを伴う皮疹が出現したため、当科を受診した。

現症 左腕に2×2mm、暗赤色、弾性硬の小結節を認める (図3)。

病理組織学的所見 表皮に著変なく、真皮中層か

ら下層にかけて囊腫がみられる (図4-a)。囊腫壁の大部分は顆粒層を有する表皮様構造をとっているが、一部の壁においては、好塩基性に染まるいわゆる basophilic cell が内腔に向かって shadow cell へと移行する像がみられる (図4-b)。

治療および経過 単純切除後、再発はない。

診断 以上より、自験例2例を hybrid cyst と診断した。

III 考 案

1966年 McGavran¹⁾ は、1094例の角化性囊腫の組織学的検討を行い、trichilemmal cyst 177例中約10%にケラトヒアリン顆粒がみられる角化部分が混在することに注目し、これを hybrid cyst と呼んだ。

一方、1983年 Brownstein²⁾ は、囊腫壁の上部 (表皮側) が表皮性ないし毛包漏斗部の角化を呈し、下部が毛包性角化を呈していて両者が境界明瞭に結合している囊腫を、hybrid cyst として報告した。ケラトヒアリン顆粒の存在そのものは毛包性角化を否定するものではないため、現在 Lever³⁾ の成書の hybrid cyst の説明には、主にこの Brownstein の論文が引用されている。

本邦でも、hybrid cyst としてはこの Brownstein 型の報告が多く⁴⁾⁵⁾、症例1もこれに合致すると思われる。しかしながら、1991年 Requena⁶⁾ は、Brownstein 型に相当する infundibular and trichilemmal cyst のほかに、infundibular

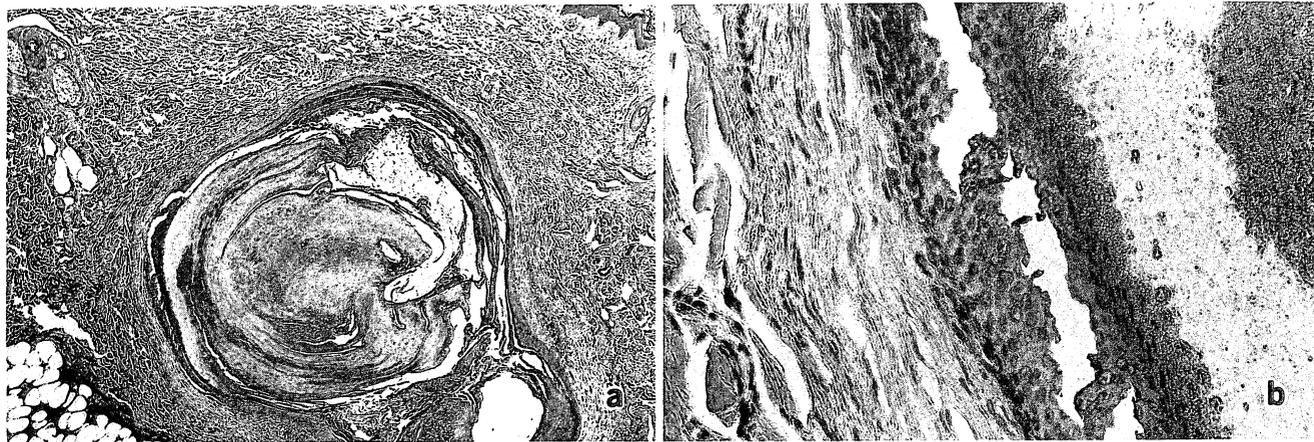


図4 症例2の病理組織像 (HE染色)

a: 弱拡大像
b: 強拡大像

cyst and pilomatricoma や eruptive vellus hair cyst and steatocystoma などの組み合わせを報告し, hybrid cyst の概念を拡大することを提案した。すなわち, 1つの嚢腫内において毛包脂腺系という同一系内での組み合わせは, あらゆる可能性が存在し, hybrid cyst は infundibular and trichilemmal cyst のみにとどめるべきでないという考えである。

今回, われわれもその意見に従い, 症例2を hybrid cyst とした。症例2については全体が単一嚢腫構造をとっており, pilomatricoma 様の角化様式を示す部分が比較的小範囲に限られたため, hybrid cyst として報告したが, pilomatricoma の一部に表皮性角化を伴うことはまれならぬみられ, pilomatricoma の特殊型とみなすこともできよう。

なお, 自験例2例ともに follicular hybrid cyst の範疇に属するものであるが, 近年毛包系内のみならず汗腺系との混在例もいくつか報告されてお

り⁷⁾⁸⁾, その発生源および hybrid cyst をどう定義すべきか, 今後検討していく必要があると思われる。

本症例の要旨は日皮学会第335回北海道地方会において発表した。

(1999年1月29日受理)

文 献

- 1) McGavran MH, Binnington B: Arch Dermatol, 94: 499-508, 1966
- 2) Brownstein MH: J Am Acad Dermatol, 9: 872-875, 1983
- 3) Lever WF, Schaumburg-Lever G: Histopathology of the Skin, 7th Ed, JB Lippincott, 1990, p 535
- 4) 長村洋三ほか: 皮膚臨床, 34(1): 57-59, 1992
- 5) 佐伯秀久ほか: 皮膚臨床, 35(13): 1937-1940, 1993
- 6) Requena L, Sánchez YE: Am J Dermatopathol, 13: 228-233, 1991
- 7) 服部尚子ほか: 皮膚臨床, 40(9): 1368-1369, 1998
- 8) Andersen WK et al: Am J Dermatopathol, 18: 364-366, 1996